

げ、切断などを行う他、除草剤の利用や草魚、昆虫あるいは病原菌による生物的防除が行われているが、いずれも難問題を抱えている。なかでも、ホテイアオイは、南米原産で、主として世界の熱帯・亜熱帯地域に広く分布している世界10大害草の一つである。わが国には、明治時代に観賞用として輸入栽培されていたが、いつの間にか栽培地から逸出して雑草化し、近年本邦における水の富栄養化、水温の上昇などが、繁茂に拍車をかけ、西南暖地にとどまらず、各地で農業水利上、漁業上、はたまた環境上大きく問題視されるようになった。筆者らの研究調査によっても、繁殖に関連する要因として、水温の適温は18~30℃、水の酸度はpH 7付近で、栄養塩については、窒素、リン、カルシウムの欠如で生育阻害があり、生産量もきわめて高く、ストロンによる増殖以外に種子による繁殖も認められ、また、種々の環境への適応力の大きいこともあげられる。以上のような水生雑草の異常発生の現実をみるにつけ、水系における富栄養化の防止をはかると共に、制限なく輸入されている観賞用水生植物が逸脱して雑草化する危険性を十分留意しておく必要がある。

5. むすび

人間が関与した環境の変動に対して、雑草が反応を示し、そのことが人間にとって大問題となっていることは、あまりにも皮肉な現象と言わざるをえない。したがって、これからの雑草対策は、単に耕地や作物の生産性を対象

とした「害」の除去を、技術的に解決することだけではすまされない。いままでの雑草ならびに雑草防除の思いきった考え直し、新時代へ向けての発想の転換が望まれる。

ここに到り、われわれは、「すべての雑草が悪者という考えはナンセンスである。」という語句をかみしめ、雑草の見直したとえば、太陽エネルギーを固定する新しいバイオマス原料として、また汚水浄化の生物的処理の一手法として、むしろ積極的に雑草を利用していくことを考える時代とも言える。すでに、有名な植物学者牧野富太郎先生も、その著、『雑草の研究と基利用』(牧野・入江1919)において、当時の国民の多くは浮草に流れ、自然物を利用するの念慮に乏しいことを指摘されているが、このことは、まさに現在にも通ずる警鐘とも言える。

以上、地球上の長い歴史の中で、めまぐるしく変動する環境に対応する雑草の適応と変異を中心に述べてきたが、これからは、有効適切な総合防除体系の確立をめざし、さらに雑草の生かし方も念頭にいた新時代21世紀にふさわしい雑草対策を、長期的展望に立って樹立することが望まれる

本研究会の開かれた倉敷市のある絵画館で「絵画の表現様式は、時代とともに変化する。とくに、われわれの生きているこの時代においては、多くの芸術家たちにより、歴史の流れの中に位置づけようとする新しい試みがなされ、つぎつぎと思いがけない展開をみせてくれる。」との語句を目にした。非常に印象に残り、雑草をいろいろの角度から見ている本論のむすびとするにふさわしい言葉のように思える。

関東地方東北部における水草の観察 I (要旨)

— トリゲモとその仲間 — 野口達也

(茨城県立結城第2高等学校)

関東地方東北部(茨城県と栃木県を含む地域)に産するイバラモ科植物(イバラモ *Najas marina* L. を除く)についての観察結果を報告する。三木茂の「山城水草誌」に従って分類すると、本地域には、ムサシモ(*N. ancistrocarpa* A. Br.), ホッサモ(*N. graminea* Del.), ヒロハトリゲモ(*N. indica* Cham.), イトリゲモ(*N. japonica* Nakai), オトリゲモ(*N. oguraensis* Miki)の5種の自生が認められた。しかし、走査電子顕微鏡を用いて、分類上重要な形質と考えられる種子の表面模様の観察を深めてみると、ホッサモやヒロ

ハトリゲモに変異が認められた。これらの変異が本地域のみでみられることなのか、今後、明らかにされる必要がある。会員諸氏所有の標本の再検討をお願いいたします。

会費(2,000円)未納の方は、至急下記へ振

り込んでいただくようお願いします。

京都 5-16477

水草研究会